

諦めない大切さ

千代中学校 三年 杉田 大貴

小学生の頃、自分はどうなりたいかを考えていた。何かに憧れて一度夢を見て、時間が経つと熱意が薄れていた。そうやって、いつもどうしても頑張れない自分がいて、すごく情けなくて嫌いだっただ。2021年の秋、僕はとあるサッカーの一試合を目に焼き付けた。鮮やかな緑の芝生の上でプレーをするのは僕の兄だ。全国高校サッカー選手権大会神奈川県予選の決勝戦だった。あちこちに飛び交うサッカーボールを夢中で目で追った。僕はまるで自分が試合をするかのように胸が高鳴っていた。僕は終始、心が気が気ではない程にソワソワして、勝ってほしい、と思うばかりだった。だが、前半戦の終盤に自チームのゴールに相手選手のシュートが突き刺さる。心臓がドキッとした。そして一失点。無得点のまま迎えた後半戦。僕たちの観客席では前向きな掛け声は止まらないが、暗い表情を浮かべる人も少なくなかった。だがピッチに立っている兄のチームは諦めている人なんてどこにもいなかった。相手チームにも気を抜いているような選手なんて誰一人いなかった。これが選手権。例えどんな立場でも、笛が鳴らない限り足を止めないのが、選手権。僕はこんなにも格好良い舞台があったのかと感じていた。僕の期待と兄の意志とは裏腹に、後半に再び失点をした。相手チームの歓声が僕の心を締めつけて痛かった。どうしても暗い顔をしてしまう。兄は真っ直ぐ、相手ゴールを見つめていた。兄はまだ、諦めていない。兄はただあのゴールを狙っていて、この状況下でも、まだまだとでも言うようにボールに喰らいついていた。

「頑張れ！」

無意識に出たその四字が兄に届かなくなっただって、兄はどうせ頑張りを続けるのだろう。全力でプレーする兄を見ると僕は暗い表情を浮かばせることなく、残り時間を気にしなくなるくらい夢中で見ていた。

「あ。」

突然、試合終了の笛が、スタジアムに響き渡った。僕は全身の力が抜けた。目で追う兄は膝から崩れ落ちていた。その試合が兄の高校サッカー最後の試合になってしまった。でも最後まで全力を尽くした兄は僕にとってすごく誇らしかった。格好良かった。兄が僕に教えてくれたのは相手チームの強さでも全国の厳しさでもなく「諦めない」ことの格好良さだった。僕もその舞台に立ちたい。兄のような選手になりたい。ただ好きでやっていたサッカーでとくに大きな目標がない僕の人生だったが、兄が僕の目標になってくれたような気がした。

人生の中で、辛くて、苦しくて負ける時がある。望むもの全てが喜劇のようにはいかない。でもどんな悲劇だってそれをくつがえせないことなんてないと僕は信じている。いつもどうしても一生懸命になれなかった、なれても継続できなかった僕だけ

ど、その日夢の舞台、目標を見つけて、大好きなサッカーはもちろん、大嫌いな勉強とも向き合うようになった。誰しもがんばれない自分に不満をもつ人はいると思う。成功したメダリストたちだってそういう時期があった人がいるはず。僕が主張したいのは世界平和や環境保護のような人類を想った願いではないが、僕の中で最も格好良い、「諦めない」ということ。それはありきたりな言葉に思えるかもしれないがちっとも簡単ではないと思う。

僕はあの日の試合、兄の背中を忘れずに、「諦めない」という気持ちを胸に兄という最高の選手を越えて、全国に行ってみせる。